ティブルシオ・スパノッキイ(1541-1606)が スペインの4都市において作成した都市型城塞の計画案に関して ON PROJECTS OF CITADELS IN FOUR SPANISH CITIES BY TIBURZIO SPANNOCCHI

高柳 伸一*

Shinichi TAKAYANAGI

The purpose of this paper is to consider the features of Spanish citadels in the late 16th century by analyzing the projects of the citadels in four cities by Tiburzio Spannocchi. These cities are categorized into two groups. One is a city near the border where some revolt against the Court could occur from the inside, the other an international port where many foreigners were always coming and going from several countries, including France and Holland that conflicted with Spain at that time. And this study concludes that the disposition of a citadel was the most important element in the planning process and it was evaluated by the distance between the center of a city and the citadel to dominate and oppress a city. With regard to Spannocchi's activities as an engineer, his professional abilities were clearly demonstrated in practical aspects like field survey, designing, supervising the construction works, and so on.

Keywords : Citadel, Tiburzio Spannocchi, Fortified city, San Sebastián, Jaca, Zaragoza

都市型城塞, ティブルシオ・スパノッキイ, 城塞都市, サン・セバスティアン, ハカ, サラゴサ

1. はじめに

1-1. 16世紀スペインの都市型城塞に関して

都市型城塞の定義

本稿^{注1)}は当時を代表する「工兵(ingeniero militar/ingeniero)」^{注2)}であるティブルシオ・スパノッキイ(Tiburzio Spannocchi, 1541-1606)^{注3)}がスペインの4都市で作成した「都市型城塞(ciudadela)」^{注4)}の計画案を論じたものである。同型城塞には外敵の侵攻に対する防御に加え, 都市を抑制する機能も備わる。この定義に関しては既往研究^{注5)}でも表現は異なっているが内容はほぼ同じとなっている。同型城塞が計画された都市または地域には, 国王または宮廷側にとっては, 不信や警戒心が内在し内部から反乱や混乱が生じる可能性があるかと判断されていた。規則的な築城^{注6)}の場合, 正五角形が適切な平面であると1570年代には認識されていたとされるが, 通常, 同型城塞の場合, 5つの稜堡(baluartes)の内, 3つは都市の外側に, 2つは都市の内側に向けられる。稜堡は重砲を設置する近世の築城にとって最も重要な部分であるが, 五角形平面の場合, 2つは都市に対する攻撃も想定したものであった。

16世紀スペインで確認できる都市型城塞

重砲の使用を前提とした稜堡式築城術^{注7)}が発達し各都市に適用されていった16世紀を通じて, イベリア半島のスペインで都市型城塞が建設された都市は, 本研究で確認している限り, ペルピニャン(Perpiñán)^{注8)}, パンプロナ(Pamplona)^{注9)}, ハカ(Jaca)^{注10)}, サラゴサ(Zaragoza)^{注11)}の4都市となっている(図1)。また同

図1 本稿で言及している都市の位置を示した図 作図著者

型城塞の計画案が作成されたがその建設工事は未履行に終わった都市としてカディス(Cádiz)^{注12)}とサン・セバスティアン(San Sebastián)^{注13)}を挙げることができる。これらの中で最も早期に建設された城塞は, 最終的に1562年にフアン・パウティスタ・カルビ(Juan Bautista Calvi, ?-1565)^{注14)}が作成した旧城郭を改築する形の計画案に従って実現されたペルピニャンの城塞である。その後, ハコメ・パレアル・フラティン(Jacome Palearo Fratin, ?-1586)^{注15)}による1571年頃の設計に従い, パンプロナでイベリア半島のスペインにおいて初めて新規に都市型城塞が建設されている^{注16)}。そして残りのハカ, サラゴサ, カディス, サン・セバスティアンに関しては, 既述のように, 前者の2都市で城塞が実現し, 後者の2都

* 大同大学 非常勤講師・博士(工学)

Part-time Lect., Daido University, Dr.Eng.

市では建設計画案が作成されたが、これらの4都市で計画案を作成した工兵が本研究で論じるスパノッキイとなっている。

1-2. ティブルシオ・スパノッキイに関して

スパノッキイはイタリアのシエナ(Siena)出身で、当時スペインが統治していたシチリア王国の副王(virrey)によって1580年にイベリア半島に派遣され、その後、死去する1606年までスペインで活動している。スパノッキイが長く活動した地域は、以前のカルビ等の工兵が主に地中海沿岸部の都市であったのに対し、旧アラゴン王国を含むピレネー国境地帯の都市となっている^{註8)}(図1)。スペインでは築城を専門とする兵科である工兵の用語は1530年頃から宮廷の公文書の中に頻繁に登場するようになるが、スパノッキイは近世のスペインで初めて設けられた、築城の専門家としての最高の地位を示す「主任工兵(ingeniero mayor)」の称号^{註9)}を1601年に獲得している。スパノッキイは上記したピネレー地帯の他にも、ラ・コルーニャ(La Coruña)^{註10)}、カディス、ジブラルタル(Gibraltar)^{註11)}、マラガ(Malaga)といった沿岸部の都市でも活動している(図1)。またアゾレス諸島(Azores)に向けた遠征にも参加している。さらに視察は行っていない都市や地点に関する助言や意見の記録も残しており、それらとしてマゼラン海峡(Estrecho de Magallanes)を統制する要塞の設計^{註12)}を挙げることができる。

2. スパノッキイが4都市で作成した城塞案と実際の築城

本稿で扱う4都市は、国際交易港であるカディスとサン・セバスティアン、そして、スパノッキイの設計に従った城塞が実現した内陸のハカとサラゴサの2組に分類できる。それぞれの都市におけるスパノッキイの計画案と実施された築城は以下になる。

カディス

実現しなかったスパノッキイ案の都市型城塞は1587年春にイングランドの艦船によってカディスが奇襲された後に計画された(図4)。同市では16世紀前半から重砲に対応した防御整備が進められていた。実施された築城は、都市を保護する海岸線に沿った新しい城壁とカディス湾を防御する複数の要塞の建設であった。

サン・セバスティアン

同市でもスパノッキイ案の城塞は実現しなかった^{註13)}。同市では都市部を包囲する旧城壁を近世的に改築する築城が1520年代から進められている。スパノッキイ案はウルグル山(Monte Urgull)に位置する12世紀末に建設された中世のラ・モタ城(Castillo de la Mota)を都市型城塞として拡張する内容であった(図5)。ウルグル山の築城に関しては、17世紀から18世紀を通じて、複数の障壁(muro)と砲台に加え、兵舎や倉庫が建設された。

ハカ

上記した2都市とは異なり、ハカではスパノッキイが設計した正五角形平面の城塞が新規に建設されている(図7)。ハカで都市型城塞が建設された要因は1590年の「ペレス事件」^{註14)}を契機にサラゴサで旧アラゴン王国の分離独立派による反乱が生じ、その後、宮廷でアラゴンのピレネー国境地帯の防御整備が検討され、ハカが周辺の要所も援護する中核都市に定められた結果であった(図1)。

サラゴサ

実際に反乱が発生したサラゴサでは、当初の大規模な築城案とは異なるが、宮廷の決定に従って、異端審問所(inquisición)^{註15)}と

しても用いられていた既存のアルハフェリア宮殿(Alfajería)を搭状の小さな四つの稜堡と幕壁を増設することで都市型城塞に改築する築城がスパノッキイの設計に従って実現されている(図9、図10)。この築城は宮廷側の200人の兵士を駐屯させる施設として実施された。宮殿の改築であるため、直接都市を抑制する配置とはなっていないが都市型城塞と理解されている^{註16)}。

3. 本研究の目的と本稿の構成

本研究は16世紀後期スペインの「工兵と都市」に関する研究として、スパノッキイが4都市で作成した都市型城塞の計画案に関して「コレクション・アパリシ(Colección Aparici)」^{註17)}や既往研究に基づいて、各々の計画案が作成された経緯を分析することで、同型城塞の特色を考察することを目的としている。具体的には、計画案が成立した主な要因、配置の評価基準、そして、スパノッキイの工兵としての役割の3点を検討する。ハカとサラゴサで城塞が建設された要因については「ペレス事件」から誘発されたサラゴサの都市の反乱という政治的な不安定さであったことが既往研究¹²⁾¹⁴⁾でも明らかになっている。従って1点目に関しては、本研究では、城塞が実現しなかったこともあり、これまで十分に検証されてこなかった、カディスとサン・セバスティアンの2都市について分析する。そして交易のため往来していた数多くの外国人に対する懸念が大きな要因であったことを指摘する。既往研究でも外国人に対する警戒心から都市型城塞が計画されたことが事実として述べられている^{註18)}。本研究では、1つの論点として史料を再検証し、具体的に国際交易港と築城の関係を分析している。2点目に関しては、複数の箇所が候補として議論されたハカとサラゴサの2都市の史料を分析する。そして配置が当事者にとって大きな関心事であったことを述べたうえで、具体的にその評価基準を示す。3点目に関しては、城塞が実現したハカとサラゴサの2都市におけるスパノッキイの役割を分析する。そして同工兵の役割は実務者としての側面が強かったことを指摘する。

本研究の新規性は、これまで個別に扱われてきた^{註19)}スパノッキイが作成した4都市の計画案に関して、上記した3つの視点に基づいて同列に考察している点にある。この枠組みから、本研究の意義は以下になる。1点目から、都市の攻撃も想定した都市型城塞という施設が16世紀スペインの宮廷に必要とされた主な要因を整理して理解することができる。2点目から、配置や設計の際に見られる同型城塞の特色を明らかにできる。3点目から、同型城塞を実現する際に必要とされた工兵の役割を具体的に示すことができる。本稿は、1点目に関連するカディスとサン・セバスティアン、そして、2点目と3点目に関連するハカとサラゴサの順に、各々の計画案を分析する構成となっている。

4. カディスの都市型城塞の計画案に関して

4-1. スパノッキイが計画案を作成した経緯

スパノッキイの計画案は、1587年春、フランシス・ドレーク(Francis Drake, 1540?-96)の率いる艦船がカディスを襲撃した後、都市を防御する中核施設として作成されたもので、同市では初めての都市型城塞の案となっている。同市は当時のスペイン経済にとって重要な新大陸との交易を担う港町で、1587年以降も1596年

と1625年にイングランドを中心とした艦船から攻撃されている。

1587年の奇襲後、宮廷からスパノッキイに出された指令^{注20)}には、1574年頃にフラティンが作成した都市部を包囲する新しい城壁の計画案^{注21)}も検討するように記されている(図2)。フラティン案の城壁は、1596年の奇襲後もスパノッキイ案の城塞と比較される形で宮廷と現地で議論されている。

4-2. スパノッキイが作成した都市型城塞の計画案

スパノッキイ案の城塞はプエルタ・デル・ムロ(Puerta del Muro)と呼ばれる地点にカルビとフラティンが既に建設していた4つの稜堡を活用する形で建設される(図3の3, 4, 5, 6)。既存の施設の再利用であるため、平面は当時一般的であった五角形ではなく四角形になる。当時の図面から、4つの稜堡を備える城塞で、サンティアゴ稜堡とサンタ・マリア稜堡の2つは旧市街地が位置し、港に隣接する都市中心部にも向けられることが解る(図3の2, 3, 4, 図4)。

図2 フラティン案の城壁を示した図(下が北) 1578年 フランセス・デ・アラバ(Francés de Alava), A.G.S., M. P. y D., XIX-24.

図3 17世紀初頭のカディス市の略図 作図著者
1. サン・フェリーペ稜堡 2. 港
3. サンティアゴ稜堡 4. サンタ・マリア稜堡
5. ペナビデス稜堡 6. サン・ロケ稜堡
7. サンタ・カタリーナ要塞

4-3. カディスで都市型城塞の計画案が成立した主な要因

カディスの城塞案が成立した要因に関して、スパノッキイの書簡には具体的な記述は少ない。しかし1587年春と1596年7月の2回の奇襲の後、宮廷の国防諮問委員会(Consejo de Guerra)^{注22)}で同市の築城が活発に議論されており、その中ではスパノッキイの城塞案も大きな割合を占めている。本節では、2回の奇襲後の史料を基に、スパノッキイの城塞案が成立した要因を検証する。

1587年春の奇襲後に議論されたスパノッキイ案の城塞

まず、1587年春の奇襲後の記録として、未履行に終わったが、実施すべき築城案が決定された1591年1月24日に開催された諮問委員会の審議録^{注23)}がある。この中で、スパノッキイ案は、フラティンとクリストバル・デ・ロハス(Cristóbal de Rojas, 1555?-1614)^{注24)}の両案と比較される形で審議されている。審議の結果、同委員会はスパノッキイ案の城塞の建設が適切であると結論付けている。

その理由は、大きな資金が必要となるフラティン案の城壁に対し、スパノッキイ案の城塞は既存の施設を活用するため建設費を抑制できる点に加えて、商売(trato)の場所であるため、カディスには信用できない多くの外国人が往来しており容易に占拠されてしまうためであると述べられている^{注25)}。この記録から、スパノッキイ案は、建設費の抑制に加え、多くの外国人が往来し滞在している国際交易港の性格によっても成立したと理解できる。

1596年7月の奇襲後に議論されたスパノッキイ案の城塞

1596年7月の奇襲の後、カディスには、複数の指揮官が視察に訪れている。各々は適切な防御整備に関する意見書を宮廷に提出しており、それらは国防諮問委員会で審議されている。そして実施すべき築城案が1597年10月3日に開催された同委員会の審議^{注26)}の後に決定されている。

本研究で確認した限り、内容を十分に検証できる意見書を作成した指揮官は計5人となっている^{注27)}。ほとんどの意見書では、スパノッキイ案の城塞に関する見解がフラティン案の城壁と共に述べられている。5人の中でスパノッキイ案を支持しているのは2人で、反対しているのは3人となっている^{注28)}。反対した3人の意見書には、その根拠として、奇襲後の人口減に伴い外国人の数も減少したため外国人に対する警戒心が軽減したことも述べられている^{注29)}。従って1587年春の奇襲後の記録と同じように、スパノッキイの城塞案が作成された要因として、往来している数多くの外国人に対する警戒心を指摘できる。なお1597年10月3日の諮問委員会の審議で適切だと判断された築城は、フラティン案の城壁に加え、ロハスが計画したサンタ・カタリーナ要塞の建設となっている(図3)。この決定には、上記した3人の意見書で述べられていたような外国人の減少に加えて、当初の試算より高くなったスパノッキイ案の城塞の建設費があったと推定できる^{注30)}。

図4 スパノッキイ案の城塞が描かれている図(下が北) 1614年 A.G.S., M. P. y D., XXI-47

5. サン・セバスティアンの都市型城塞の計画案に関して

5-1. サン・セバスティアンの築城とスパノッキイの計画案

サン・セバスティアンはカディスと同じように国際交易港で、当時スペインと対立していたフランスやオランダとも交易が行われていた。同時にピレネー国境地帯に位置する街道の要所で、フランスから1478年と1512年に奇襲されている。スパノッキイが作成した都市型城塞の計画案は1595年と1603年の記録^{注31)}からその内容を知ることができる。この計画案は、新しい城壁の建設によって、都市部とウルグル山を分離して、都市部の築城は半ば放棄する形で、ウルグル山のモタ城を都市型城塞に拡張する築城となっている(図5)。従って、カディスと同様に、既存の施設を活用する案であった。1520年代か

ら進められた近世時代の築城は、都市部を包囲する南と東西の3つの側面の旧城壁を近世的に改築する築城であった(図5)。スパノッキイ案の城塞は、この旧城壁を改築する築城の対案として理解できる。

スパノッキイ案は、同市における最初の明確な都市型城塞の計画となっている。しかし1574年にフラティンとベスパシアノ・ゴンサガ(Vespasiano Gonzaga, 1531-1591)が残している構想案^{注32)}においても、モタ城を改築して、その一方で都市部の築城は行わないとする内容で、構想としては後のスパノッキイ案と類似している。既述のようにスパノッキイ案は実現しなかったが、同案は後に工兵ヘロニモ・デ・ソト(Jerónimo de Soto, 1570?-1629)^{注33)}に受け継がれ、その後も17世紀を通じて再び建設が検討されている^{注34)}。

図5 実施されたサン・セバスティアンの築城の略図 作図著者
1. ラ・モタ城 2. 16世紀半葉の障壁 3. 稜堡 4. 凹角堡 5. 半月堡 6. ラス・デマス砲台(サンタ・クララ塔) 7. サン・テルモ発射台 8. 砲台 9. 倉庫 10. 兵舎
11. 中央広場(1723年創建) 12. サンタ・テレサ教会堂 13. サン・テルモ修道院

5-2. スパノッキイが作成した都市型城塞の計画案

スパノッキイはラ・モタ城の拡張には、港の制圧と都市(villa)の防御の2つの効力が備わるべきであるとしている^{注35)}。同案を示す図面がないため詳細には再現できないが、その基本形は、史料と後の図面の検証から、後のラス・デマス砲台(batería de las Demas)付近に位置していたサンタ・クララ塔(torreon o garita de Santa Clara)に発射台(plataforma)を建設し、そこから西から東に続いている16世紀半ばに建設された障壁に小稜堡(valuartillos)を増設し、さらに、そこから延長する形で小稜堡を備える新しい城壁(muralla)をサン・テルモ発射台(plataforma de San Telmo)まで建設する内容になる(図5の2, 6, 7)。すなわち既存の障壁(図5の2)に連結する形で、小稜堡を備える城壁を新規に建設し、都市部とウルグル山を東西方向に分離することで、ラ・モタ城を都市型城塞として拡張する計画である。この形態からサンタ・テレサ教会堂やサン・テルモ修道院も位置する市街地を見下ろして、常に都市を抑制する城塞となる(図5の12と13)。なお砲台または発射台と稜堡の違いは前者が主に重砲の搭載に限定した施設に対して、後者は視界と弾道も考慮した三角形平面の施設である。近世の築城では複数の稜堡を相互に補完するように配置する。

都市部を包囲する旧城壁に関しては、スパノッキイはフラティン等と同様、新しい施設は加えないとしている^{注36)}。この案は、フラティン等が構想したように、最終的に都市が敵軍に占領されないことを最優先に考えた結果であると言える。す

なわち都市が占拠される場合も想定して、敵軍によって利用される防御施設は都市には増設しないで、ラ・モタ城を拡張することで、例え都市が一時的に占拠されても再び都市を回復する能力を有する城塞を実現する案であったと理解できる。

スパノッキイは小稜堡と表現していたが、後にソトが活動していた時期の史料には稜堡(valuartes)と言い表されており^{注37)}、より完全な稜堡の建設が計画されていた。また実現しなかったが、1641年にはソト案の城塞の東側半分を建設するような、3つの稜堡を備える城壁を新規に建設する形態の都市型城塞の図面が作成されている^{注38)}(図6)。

図6 サン・セバスティアン(上が北) 1641年 A.G.S., M.PyD., V-195.

5-3. サン・セバスティアンで城塞案が成立した主な要因

既に検討したようにカディスで城塞が計画された背景には建設費の抑制に加え国際交易港としての性格があった。本研究ではスパノッキイがサン・セバスティアンで活動していた時期の史料から、カディスのように外国人に対する警戒心を具体的に表した記録^{注39)}を確認できなかった。しかし1610年の同市の助役(Martín de Errazquin, teniente alcalde, 生没年不詳)に対する民事訴訟(pleito civil)の記録や、その後の史料にはカディスと類似する、築城と国際交易港の関係を示す記述が含まれている。本節ではこの関係に関して既往研究や「コレクション・アパリシ」から3つの記録を取り上げる。

1つ目は上記した訴訟の記録^{注40)}で、その中には都市の安全と防御にとって外国の商人が懸念材料となっていた記述を確認できる^{注41)}。その市の助役に対する告発の記録には、市の慣例として、公職に就いている人物は、宿屋の主人の仕事を継続できないとされているが、その理由として、都市の城門は、毎夜、閉められるが、その鍵は被告が管理しており、(著者補足:宿屋の仕事を続けて外国人と接する機会の多い)被告と外国人が話し合えば、都市と、都市の要塞(fortaleza)を占拠することができるという、都市の安全に対する懸念も記されている^{注42)}。2つ目は宮廷の国防諮問委員会の1622年の記録^{注43)}である。この記録には資金不足で実現できていないが、サン・セバスティアンで都市型城塞の建設が決定された理由は、同市は交易が盛んで、多くの外国人が出入りしているためであると記されている。最後の記録は同市の総督(gobernador)であるディエゴ・デ・イサシ(Diego de Isasi, 生没年不詳)が国王に宛てた1643年2月1日の書簡^{注44)}である。その中で、都市型城塞の建設が適切だと進言しているが、その理由は、市内には特にフランスからの多くの外国人が徘徊しており、フランスの港から短時間で援軍が来襲できることを考慮すると、同市は常に奇襲の危険に曝されているためであるとしている。以上、サン・セバスティアンの

計画案もカディスと同様に往来する多くの外国人に対する警戒心によっても成立していたと理解できる。従って4都市の計画案が成立した主因は、カディスとサン・セバスティアンにおける多くの外国人に対する警戒心と、ハカとサラゴサにおける政治的な不安定さに基づく都市に対する不信という2種類に整理できる。

6. ハカで建設された都市型城塞に関して

6-1. スパノッキが城塞を設計した経緯

既に述べたように1590年の「ペレス事件」を契機にサラゴサで都市の反乱が発生し、その後ハカとサラゴサで城塞が建設される。

図7 ハカ城塞の設計 1592年5月24日のスパノッキの書簡と共に宮廷に送付された図面 M.P. y D., XXXVIII-92.

本研究で確認した限り、ハカ城塞の建設に関する本格的な協議はスパノッキがハカに派遣される前に作成された1592年2月9日付けの指揮官アロンソ・デ・バルガス(Alonso de Vargas, 生没年不詳)によるフェリーペ2世国王(在位1556-98)宛ての書簡^{注45)}から始まる。この書簡には旧アラゴン王国の国境地帯の防御整備を整える構想が示されている。同時にスパノッキが各地点で調査を行い適切な築城を指示することも記されている。このバルガスの書簡に対する国王の同年2月20日付けの返答^{注46)}にはスパノッキが築城に関する全ての事柄を決定することになると述べられている。これらの書簡のやり取りの後、同工兵は現地に到着し上記したバルガスの2月9日の書簡に述べられている地点^{注47)}を中心に調査を行い、1592年4月7日付けの国王宛ての意見書^{注48)}の中で、ハカを含むアラゴンのピレネー国境地帯の複数の地点に関する説明を行っている。この4月7日の意見書でスパノッキは3か所の候補地を示す形で、配置を中心としたハカ城塞の計画案を説明している。そして1592年5月8日の宮廷からの書簡^{注49)}の中に国王がハカを同地帯の防御の中核であることを理由に城塞の建設を決定したことが記されており、その後、上記したスパノッキの4月7日の意見書を土台に現地における協議が1592年5月10日に指揮官バルガス、エルナンド・デ・アコスタ隊長(capitán Hernando de Asosta, 生没年不詳)、エスティバン・デ・イバラ(Estevan de Ibarra, 生没年不詳)、フアン・ベラスケ(Juan Velazque, 生没年不詳)、そして、スパノッキの計5人で行われている。その結果、最終的な配置が決定され、寸法(proporciones)と稜堡の数も定められている。そして同年5月24日付けの書簡^{注50)}で、スパノッキは城塞本体の土塁(terraplén)の工事を既に開始したことを国王に報告している(図7)。

6-2. スパノッキが作成した都市型城塞の計画案

上記の通り、1592年2月9日から同年5月10日までの約3ヶ月の協議の末、ハカで新規に城塞の建設が開始されている。その期間中、スパノッキが残している城塞に関する記録は、上記した4月7日の意見書^{注51)}に加え、5月10日に5人で協議が行われ実施

案が決定した様子を報告した5月13日の書簡^{注52)}となっている。既に述べたようにスパノッキの4月7日の意見書では配置が大きな関心事であったが5月10日の5人の協議でも同様となっている。

図8 ハカ城塞の配置の3か所の候補地を示した図 作図著者

配置に関する議論と評価基準

具体的な配置に関して、4月7日の意見書の中で、スパノッキは、(1)サン・フランシスコ修道院の地点、(2)実際に建設された地点、(3)南側のガス川(río Gas)付近の郊外の地点の3か所を示している(図8)。3つ目の地点は正確には特定できないが、スパノッキが最も適していると述べている配置で^{注53)}、説明文から図8のように推測できる(図8の1から3は上記3候補地を表す)。この3か所の配置は現地で5月10日に他の4人の指揮官も加わって協議され、最終的な配置が決定されている。その様子は既に述べたスパノッキの5月13日の書簡の他、5月11日のアコスタ隊長の書簡と5月12日の指揮官バルガスの書簡^{注54)}からも知ることができる。

配置に関する上記した計3通の書簡から、各々の配置が協議された際の評価基準は次のように整理できる。(a)場所の高低、(b)都市中心部との位置関係から見た都市を抑制する機能、(c)敵軍の侵攻に対する防御力、(d)既存の建物を解体する必要があるのか否か、(e)建設費と工期である。実際の配置は2つ目の地点となり、5月10日の決定を説明した3通の書簡から、その決定要因を理解できる。その要因は、都市を抑制する配置で、高所にもなっており、また解体する家屋も少なく済むということで、上記した(a)から(e)の基準で評価された結果であると理解できる。4月7日の意見書で述べられている本来のスパノッキ案では、上記(d)と(e)を重視して3つ目の地点が適切であるとしていたが、同案では(b)の機能が劣るとして最終的に他の指揮官の考えに従っている。そしてスパノッキは5月10日の協議の際、配置の他、稜堡の数と寸法も決定され、全員の同意に従って既に杭打ち(estacas)を行ったことを5月13日の書簡の中で記している。さらに70,000デュカード(ducados)となる建設費の試算も報告している。

6-3. スパノッキの工兵としての役割

城塞が実現する経緯におけるスパノッキの役割は、指揮官と共に協議する以前、現地調査に基づいて配置の候補地を選定し、その後、協議によって配置や稜堡の数そして規模が決定されると、それらに基づいた実施設計を行うことであった。配置はスパノッキが選定した3つの候補地から選ばれたが、実施案は同工兵が最も適切であるとしていた3つ目の配置ではなかった。これらから同工兵の役割は、配置の候補地の選定や実施設計そして建設工事の指揮等といった実務者としての側面が強かったと言える。

7. サラゴサで実現した都市型城塞に関して

7-1. スパノッキイが計画案を作成した経緯

反乱が起こったのはサラゴサであったが、既に検討したように、ハカが旧アラゴン王国の防御体制の中核に位置付けられたため、サラゴサに先行して、ハカにおいて新規に城塞が建設されていた。それとは対照的に、サラゴサでは 200 人という一定規模の兵士を駐屯させる目的に従い既存のアルハフェリア宮殿を城塞として改築する築城に止まっている(図 9, 図 10)。この最終的な築城の形態が定まる期間は、本研究で確認している限り、現地から最初に築城案^{注 55)}が示された 1592 年 1 月から、実施案の形態が宮廷から現地に示された同年 7 月 10 日^{注 56)}までの約半年間で、その後も、宮殿を改築する実施設計に関して宮廷と現地の間で書簡のやり取りが繰り返されており、フェリーペ 2 世国王がスパノッキイによる実施設計を承認するのは 1593 年 3 月 2 日付けの書簡^{注 57)}によってである。このようにサラゴサにおいては築城の協議が開始され建設工事が始まるまで、ハカでは約 3 ヶ月であったのに対して、1 年以上経過している。

図 9 アルハフェリア宮殿に 4 つの稜堡を増設する実施案を示した図 1593 年 ティブルオ・スパノッキイ A.G.S., M.PyD., V-87.

図 10 アルハフェリア宮殿の平面 (上が北) ミグエル・マリン(Miguel Marin) 1757 年 Archivo General Militar de Madrid.

7-2. 指揮官バルガスの書簡とミランダ隊長の計画案

スパノッキイの他、城塞の計画案を作成した人物がいなかったハカとは異なり、サラゴサでは同工兵が到着する前に 2 つの築城案を確認できる。1 つ目は、指揮官アロンソ・デ・バルガスが国王に送付した 1592 年 1 月 25 日付けの書簡^{注 58)}の中で述べられている。この書簡には都市の 3 つの地点^{注 59)}を示しながら各々の築城案が説明されているが、図面もなく、また、説明も短いため詳細な検証は困難である。2 つ目は、フランシスコ・デ・ミランダ隊長(capitán Francisco de Miranda, 生没年不詳)による図面を伴う 1592 年 2 月の築城案^{注 60)}である。ミランダ隊長の案も実施案より大規模な、A と記された五角形平面の城塞(城塞 A)と、B と記された城塞 A より小さな四角形平面の要塞(要塞 B)の計 2 つを新規に建設する計画となっている。同案を説明した報告書には都市図、城塞 A、要塞 B の計 3 枚の図面が添えられており、都市図に記されている数字に従って各施設の配置等が説明されている^{注 61)}(図 11, 図 12, 図 13)。

図 11 ミランダ隊長の報告書と共に送られた都市図 (下が北) A.G.S., M.PyD., VI-54.

図 12 ミランダ隊長の報告書と共に送られた城塞 A の図面 (下が北) A.G.S., M.PyD., VI-55.

図 13 ミランダ隊長の報告書と共に送られた要塞 B の図面 (下が北) A.G.S., M.PyD., VI-56.

7-3. スパノッキイがサラゴサで作成した都市型城塞の計画案

ミランダ隊長の城塞案に対するスパノッキイの見解

スパノッキイが詳細にサラゴサの城塞案を述べている記録は 1592 年 6 月 19 日の書簡^{注 62)}となっている。この中でスパノッキイは、先ず、名前は引用していないが、大きな都市であるため 2 つの城塞(dos castillos)を計画していたミランダ隊長の案に対して、実現は困難であると述べている。これは膨大になる建設費を考慮した見解であったと想像できる。その一方で、ミランダ隊長が計画していた要塞 B の配置に関しては、自身の案とは異なっているが、スパノッキイは、旧城郭付近に位置するため、都市の主要な建物があり、高所にもなっており、付近の建物は要塞に従うことになると評価している^{注 63)}(図 14 の 23 と 25)。また旧城郭の全てを解体することになるが、援軍を受け入れる際にも必要と考えられていた、河の交通も制御できるとも述べている(図 14 の 30)。スパノッキイは主要な建物に関して具体的な名前は引用していないが、対岸には大聖堂、セオ広場(Plaza de Seo)、ヌエストラ・セニョーラ・デル・ピラール(Nuestra Señora del Pilar)が集積しているおり、図 11 でも最も建物が密に描かれている箇所である(図 14)。主要な建物が集まる中心部を抑制する配置に対する評価は、ハカ城塞における協議からも読み取れた。またカディスとサン・セバスティアンにおいても、既存の施設を再利用するため配置は固定されていたが、城塞は都市中心部を抑制するように計画されていた。

スパノッキイが述べている城塞の配置

スパノッキイ案では 1 つの城塞のみが建設されるが、その計画案を説明した 1591 年 6 月 19 日の書簡^{注 64)}でも、ハカと同様に配置は大きく扱われている。そしてスパノッキイは 2 か所の候補地を示している。それらはトロ郊外(Campo del Toro)とアルハフェリア宮殿になっている(図 14 の 27 と 28)。最初のトロ郊外はミランダ隊長も援軍の受け入れも容易で周囲一帯を見渡せる地点として城塞 A の配置の候補地にしていた^{注 65)}。スパノッキイは同地点を最も高い場所になっており、都市を見下ろすように城塞を自由に設計・配置することができ、都市と城塞の距離も調整できると評価している。そ

の一方で、同地は河に対しては効力が少なくなり、またミランダ隊長も言及していた石の橋(ピエドラ橋)付近に建設が計画されていた塔とは相互に援護できないとしている(図14の22)。さらに、宮殿も解体することになると述べているが、これは城壁外周部の整地に伴う処置だと理解できる^{注66)}。

他方、宮殿の地点に関しては、指揮官バルガスは、宮殿の改築案は都市と離れているため効力が少ないと述べていたが^{注67)}、その後、同地を城塞にする考えが、国王がハカ城塞の建設を決定したことを現地に報告した宮廷からの1592年5月8日の書簡で示唆されている^{注68)}。その宮殿の地点について、スパノッキイは、バルガスの指摘に反論するように、同地と河の間に位置する水車小屋(molinos)付近に塔を建設することで、河と宮殿の区間の防御が容易になると述べている(図14)。その一方で、懸念材料として、既存の建物を活用するため、城塞の設計には制約が生じる点を指摘している。さらにポルティージョ教会(Iglesia de Nuestra Señora del Portillo)は傷害物となってしまうが、同教会堂はトロ郊外に城塞を建設する場合でも解体が望ましいとしている^{注69)}(図14の9)。

図14 都市の各点を示した図(下が北)(図11に基づいて著者が作図)
3. サン・アウグスティン 23. 旧城郭 9. ポルティージョ城門
25. 要塞Bの建設場所 12. サン・フアン・デ・ロス・パンデス
27. アルハフェリア宮殿 20. セブルクロ・デル・モンハス 28. トロ郊外
21. 木の橋(マデラ橋) 30. エブロ川 22. 石の橋(ピエドラ橋)
33. ラ・グエルバ郊外

都市型城塞の配置の評価基準

以上、指揮官バルガス、ミランダ隊長、スパノッキイの3人の記録から、サラゴサにおける城塞の配置の評価基準は、施設の種類や数に関連する都市の規模に加え、(f)場所の高低、(g)都市中心部との位置関係(都市との距離)、(h)交通路の統制(援軍の受け入れと河の統制)、(i)解体する建物の種類と数であったと整理できる。ハカと比較して、サラゴサでは、フランスとの国境からの侵攻に対する不安が少ないことから、ハカで見られた(c)敵軍の侵攻に対する防御力が見えにくい。その一方で、再び反乱が生じた際にはカスティージャ王国から軍隊を派遣する必要性^{注70)}があることから、ハカでは見えにくかった、(h)交通路の統制(援軍の受け入れと河の統制)が加わったと理解できる。しかし(f)場所の高低(ハカでは(a)), (g)都市中心部との位置関係(ハカでは(b)), そして、(i)解体する建物の種類と数(ハカでは(d))は双方の都市で共通していた。なおサラゴサではハカで見られた(e)建設費と工期は、分析した上記3人の記録には強く現れていないが、次節で論じるように、後の実施設計が定まる段階で現地と宮廷において議論されている。

7-4. 実施案とスパノッキイの工兵としての役割

1592年6月19日の書簡でスパノッキイが配置の候補にしていた2か所の地点の1つは、宮廷が一定規模の兵力を駐屯させる目的に

従い最終的に定めた実施案と同じアルハフェリア宮殿であった。しかし同書簡の中で、スパノッキイは建設費を説明する際、幾らか小さくなるとしているが、大規模なパンプロナ城塞と比較している^{注71)}。また、指揮官バルガスはスパノッキイ案に関して、どちらの配置の場合でも、パンプロナ城塞と同程度の建設費になると批判しており^{注72)}、さらに宮廷の記録でも同様な批判が同工兵に向けられている^{注73)}。そのため当初のスパノッキイ案の城塞は大規模であったと理解できるが、実施案は宮廷からの1592年7月10日の書簡^{注74)}で示されている、宮殿に4つの稜堡と幕壁を増設する築城に止まっており、本来のスパノッキイ案と実施案は規模の点で大きく異なっていたと判断できる。

宮殿を城塞に改築する実施設計が定まる経緯に関しては、十分な図面がないため詳細には再現できないが、スパノッキイは2つの候補地の説明をしている1592年6月19日の書簡で、5つの側面の城塞として設計されていると述べている^{注75)}。そのため、当初は改築の形態に関しても、4つの稜堡を増設する実施案とは異なる設計をスパノッキイは示していた可能性を指摘できる。

その後には作成された1592年7月22日のスパノッキイの書簡と共に送付された図面には、実施案と同じ形態である4つの稜堡を宮殿本体に増設する設計が示されているが、実施案より稜堡は大きく描かれているように見える(図15)。1593年3月2日の宮廷からの書簡^{注76)}で承認された最終的な設計では、図15の稜堡より小さな塔状の稜堡に見え、宮殿の改築に関しても、実施案は当初の設計より規模が縮小した可能性がある(図10)。以上、スパノッキイの役割として、配置の候補地の選定が第一に挙げられる。城塞の設計に関しては、当初、大規模な案を示していたが、実際には小規模な宮殿の改築に止まっていることから、結果として、宮廷の方針に従った実施設計に限定されていたと言える。

図15 アルハフェリア宮殿の改築案(上が北) スパノッキイの1592年7月22日の書簡と共に送付された図面 A.G.S., M.PyD., VIII-67.

8. まとめ

16世紀のスペインで確認できる都市型城塞が計画された6都市の中の4都市の計画案に関して、作成者であるスパノッキイの活動の分析を介して、同型城塞の特色を考察することを目的に、計画案が成立した主な要因、配置の評価基準、スパノッキイの工兵としての役割の3つの視点から論じた。4都市は国際交易港の2都市と、反乱も起こり得る政治的に不安定な2都市に整理して論じた。1点目に関しては、本研究では、これまで城塞が実現しなかったこともあり十分に分析されていなかったカディスとサン・セバスティアンを検証した。そして計画案が成立した主な要因として、国際交易港であるため往来していた多数の外国人に対する警戒心があったことを示

することができた。本研究では有事の際に外国人が蜂起して 16 世紀のスペイン都市が占拠された事例は確認できなかったが、史料の検証から、国際交易港は占拠されやすいと認識されており、その認識が都市型城塞の計画案を成立させていたと理解できた。他方、ハカとサラゴサに関しては、既往研究によって「ペレス事件」を契機に、双方の都市で城塞が建設されたことが既に明らかになっていた。これら 4 都市はこれまで個別に扱われてきたが、本研究で同時に検証した結果、計画案が成立した背景には、政治的な不安定さに基づく都市に対する不信と、国際交易港に往来する多数の外国人に対する警戒心という 2 種類の要素が存在していたと整理して理解できた。

16 世紀スペインの都市型城塞にはその他パンプロナとペルピニャンが含まれる。史料の検証は今後の課題となるが既往研究^{注 77)}からも、パンプロナはハカと類似する政治的に不安定な国境地帯の都市であったと言える。他方ペルピニャンに関してはフランスからの多数の移民に対する警戒心もあったと指摘されており^{注 78)}、計画案が成立した背景には、国際交易港と同様に、外国人に対する警戒心もあったと想像できる。

2 点目に関しては、複数の配置が議論されたハカとサラゴサを取り上げて考察した。双方で配置は大きな関心事であった^{注 79)}。具体的な配置の評価基準に関しては、地政学の違いから相違点もあったが、場所の高低、都市中心部との位置関係、そして、解体する建物の種類と数は、双方で共通していた。都市中心部を抑制する配置に対する高い評価は、配置が固定されていたカディスとサン・セバスティアンからも読み取れ、この配置の評価基準は同型城塞の最大の特徴であると結論付けることができる。

3 点目に関して、城塞が実現したハカとサラゴサにおいて建設工事が開始されるまでのスパンノッキの役割を分析した。そして史料の分析から、双方の都市で当初のスパンノッキ案は実現しておらず、結果として、スパンノッキの役割は、宮廷が判断を下す際や現地で協議を行う際に必要な、配置の候補地の選定等の現地調査や、その後の実施設計、さらには工事の指揮等といった実務者としての側面が強かったと理解できた。

参考文献

- 1) Alicia Cámara: Tiburzio Spannocchi, ingeniero mayor de los reinos de España, Espacio, Tiempo y Forma, UNED, n.2, Madrid, pp.77-91, 1988.
- 2) Alicia Cámara: Fortificación y ciudad en los reinos de Felipe II, NEREA, Madrid, 1998.
- 3) Víctor Echarri Iribarren: Las murallas y la ciudadela de Pamplona, Gobierno de Navarra, Pamplona, 2000.
- 4) Pablo de la Fuente de Pablo: La ciudad como problema militar: Perpiñán y los ingenieros de la monarquía española (ss. XVI-XVII), Tesis Doctoral, Ministerio de Defensa, Madrid, 1995.
- 5) Concepción Porras Gil: Organización defensiva española en los siglos XVI-XVII desde el río Eo hasta el valle de Arán, Valladolid, 1995.
- 6) Florencio Idoate: Las fortificaciones de Pamplona a partir de la conquista de Navarra, Príncipe de Viana, n.54-55, pp.54-154, 1954.
- 7) Ricardo del Arco: La ciudadela de Jaca, Archivo Español de Arte, Madrid, pp.277-291, 1945.
- 8) Enrique Osset Moreno: El castillo de San Pedro de Jaca, Zaragoza, 1992.
- 9) Alicia Cámara Muñoz: La ciudadela del rey en Jaca, Signos, Arte y Cultura en Huesca, Huesca, pp.87-95, 1994.
- 10) José Javier de Castro Fernández: Ciudadela o castillo. Jaca y los fuertes del Prinerio Aragonés, Castillos de España, Madrid, pp.11-20, 2002.
- 11) Juan Carlos Moreno Anaya: El castillo de San Pedro de Jaca.

- ciudadela. Una fortaleza abaluartada del siglo XVI, Actas de las II Jornadas de Castellología Aragonesa, Zaragoza, pp.119-148, 2006.
- 12) Manuel García Rivas: La “invasión” de Aragon en 1591. Una solución militar a las alteraciones del reino, Zaragoza, 1992.
- 13) Alicia Cámara: La Fortaleza de Felipe II en la Aljafería de Zaragoza, Reales Sitios, n.134, pp.30-39, 1997.
- 14) Pedro I. Sobradie: La Aljafería filipina 1591-1597 los años de hierro, Zaragoza, 2006.
- 15) Víctor Fernández Cano: Las defensas de Cádiz en la edad moderna, C.S.I.C., Sevilla, 1973.
- 16) Clavide Alvarellos Vigon: San Sebastián, Historia de sus fortificaciones, siglos XVI y XVII, San Sebastián, 1963.
- 17) Fernando Mexia Carrillo: El Castillo de Santa Cruz de la Mota y las murallas de la plaza de San Sebastián, San Sebastián, 1979.
- 18) Damià Martínez Latorre: Giovan Battista Calvi, ingeniero de las fortificaciones de Carlos V y Felipe II (1552-1565), Tesis Doctoral, Ministerio de Defensa, Barcelona, 2002.
- 19) Marino Viganò: «El fratin mi ynginiero» I Paleari Fratino da Morcote ingegneri militari ticinesi in Spagna (XVI-XVII secolo), Edizioni Casagrande, Bellinzona, 2004.
- 20) 中島智章:ペルピニャンの都市築城の近代化改修とミディ運河をめぐるフランス国王工兵の動向, 日本建築学会大会学術講演梗概集, 建築歴史・意匠, pp.775-776, 2013.8.
- 21) 和田史織, 杉本俊多:スペイン・サンセバスティアン市における都市空間の変遷に関する研究, 日本建築学会中国支部研究報告集 N.33, pp.938-1-938-4, 2010.3.

注

- 注 1) 本稿は次の 4 編の拙稿の研究結果をまとめたものである。1596 年の奇襲後のカディスにおける工兵クリストバル・デ・ロハスの活動に関して、日本建築学会計画系論文集 第 74 巻 第 635 号, pp.273-281, 2009.1. ハカに建設された都市型城塞に関してービレネー国境地帯の 16 世紀スペイン都市における防御整備ー, 日本建築学会大会学術講演梗概集, F-2, pp.611-612, 2011.9. 1591 年の反乱後のサラゴサで検討された築城案に関してー16 世紀スペインの都市型城塞に関する研究ー, 日本建築学会東海支部研究報告集 第 50 号, pp.753-756, 2012.2. サン・セバスティアンで計画された都市型城塞ービレネー国境地帯に位置する 16 世紀スペイン都市の防御整備 その 2ー, 日本建築学会大会学術講演梗概集, 建築歴史・意匠, pp.489-490, 2013.8.
- 注 2) スペインで工兵部隊(cuerpo de ingenieros)が正式に創設されるのは 1711 年であるため、それ以前の ingeniero militar/ingeniero (英 military engineer/engineer)を「工兵」と訳さず、「城塞技術者」や「城塞建築家」または「軍事技師」等とも訳すことができる。
- 注 3) 本稿では ciudadela(英 citadel)を「都市型城塞」としたが「シタデル」や「都市抑制型城塞」等とも訳せる。当時の記録では都市型城塞と理解できる施設でも、要塞(fuerte)や城塞(castillo)の用語が使われている場合も多くなっている。
- 注 4) 都市型城塞の定義に関しては主に次の文献を参照した。参考文献 2), p.159. 参考文献 3), p.122. 参考文献 4), p.25.
- 注 5) 16 世紀の築城書では、築城は規則的な築城(fortificación regular)と不規則的な築城(fortificación irregular)に分類される場合もある。例えばロハスの築城書では第 5 章(fol.40-45)で三角形から五角形の正多角形の要塞が説明され、その後、第 6 章(fol.45-49)で不規則な形状の要塞が取り扱われている。Cristóbal de Rojas: Teoría y práctica de fortificación, Madrid, 1598.
- 注 6) 稜堡式築城術とは稜堡と幕壁を組み合わせることでどのような形の囲い地も防御する築城である。侵入者を側面攻撃するように稜堡の配置が決定される。稜堡は 1450 年頃から発展し始め、1530 年代末には、稜堡の完成形となる、平面が三角形の石造の角型稜堡が実現したとされる。
- 注 7) スペインが領有していた地域においては新規に建設された最初の都市型城塞はアムベレス(Amberes, 英 Antwerp アントワープ)の城塞となる。同城塞は 1567 年にイタリア人建築家フランセスコ・パチオット(Francesco Paciotto, 1521-1591)によって設計された。
- 注 8) 「工兵と都市」に関しては次の拙稿でも論じた。主要な工兵の活動からみた 16 世紀後期スペインの要塞化事業ー地中海から大西洋へー, 第三回西洋建築史若手研究者研究発表会 日本建築学会主催 配布資料 pp.27-34, 2013.12.
- 注 9) 主任工兵は国防諮問委員会と砲兵隊大將(capitán general de Artillería)のみが上位に来る地位であったとされる。参考文献 1), p.81.
- 注 10) 次の拙稿で論じた。1589 年の奇襲後のラ・コルーニャでティブルシオ・スパンノッキが作成した城壁案ー近世スペインの城壁都市の外周部の整地に関する考察ー, 日本建築学会東海支部研究報告集 第 51 号 pp.741-744, 2013.2.
- 注 11) 次の拙稿で論じた。スペイン統治時代(1462-1704)のジブラルタルにおける築城ー既存の城壁を活用した都市の防御整備ー, 『建築史攷』鈴木博之先生献呈論文集刊行会編 中央公論美術出版, pp.89-104, 2009.10.
- 注 12) 設計図は次となる。Proyecto para un fuerte en el Estrecho de Magallanes, 1580, Museo Naval, Madrid, Colección Navarrete.

注 13) 最大の要因は資金不足であると思われる。1638 年にフエンテラビア(Fuenterrabía) がフランス軍から攻撃された後、限られた資金で南側の築城が重点的に行われたことも影響していると考えられる。その後 1644-67 年の期間、築城は資金不足で停滞している。

注 14) 「ペレス事件」とは、フェリーペ 2 世国王の秘書で対外政策に決定的な影響力を誇っていたアントニオ・ペレス(Antonio Pérez, 1540?-1611)がマドリードの牢から生国アラゴンに脱走した 1590 年 4 月の後、ペレスを処刑しようとした国王側に対して、アラゴンの一部貴族やサラゴサの市民が起こした反乱のことである。1469 年のカスティーリヤ王国とアラゴン王国の合併以降、カスティーリヤ王国を中心とする統一事業に対する不満は 17 世紀を通じても強かったとされる。ペレスは 1578 年に国王の異母弟フアン・デ・アウストリア(Juan de Austria, 1545-78)の秘書エスコベードの暗殺に関与した罪で牢に投獄されていた。フェリーペ 2 世はカスティーリヤの軍隊を 1591 年末にサラゴサに派遣して反乱を武力で鎮圧し、その後、ハカとサラゴサで城塞が建設された。

注 15) 異端審問所とはプロテスタントや異端者を発見、処罰、予防を目的とする施設である。活動の頂点は 16 世紀でフェリーペ 2 世は中央集権的な国家権力を発揮する武器として利用した。「ペレス事件」の際もカスティーリヤ国内法はアラゴンには適用できないため、国王はペレスを異端審問の罪状で処刑しようとした。

注 16) 例えは次の文献で指摘されている。参考文献 2), p.171.

注 17) 同コレクションは、工兵隊に属し大佐(coronel)でもあった José Aparici y García が Archivo General de Simancas(以下 A.G.S., Valladolid)の築城に関する史料を 1844-56 年の間に書き写したもので、Archivo General Militar de Madrid(以下 A.G.M.M.)に保管されている。

注 18) カディスに関しては、参考文献 15), p.25 で 1591 年 1 月の審議において、スパバッキイ案が採用された理由には往來する多くの外国人に対する懸念があったことが述べられている。その一方で、参考文献 15)には、本稿で論じている 1597 年 10 月の決定の際に考慮された外国人の減少は言及されていない。サン・セバスティアンに関しては、城塞の計画は数多くの外国人が要因であることは、参考文献 2), p.161 で短く述べられている。さらに参考文献 16), p.155 では商業が盛んであり外国人が頻繁に往來していることから都市型城塞が計画されたとする 1622 年の史料が引用されている。また参考文献 17), p.32 では注 44 で引用した同じ史料に基づいて都市型城塞の必要性が現地から宮廷に報告されたことが述べられている。これら既往研究で述べられている外国人と築城の関係は、経緯の説明の中で 1 つの事実として述べられているが、本研究のように、論点としては扱われていない。

注 19) 4 都市の計画案に焦点を置いた研究はこれまでなされていないが、参考文献 2), pp.166-171 で、スペインで建設された都市型城塞が論じられており、その中で 4 都市の計画案に対する説明があるが、未履行に終わったカディスとサン・セバスティアンに関する記述は非常に少なく、また、城塞の配置基準やスパバッキイの工兵としての役割は分析されていない。参考文献 3), pp.123-131 においてもフェリーペ 2 世の時代にスペインが統治していた地域に建設された都市型城塞が紹介されているが、カディスとサン・セバスティアンは扱われていない。

注 20) Copia de orden mandando a Tiburcio Espanochi ir a las ciudades de Cádiz y Gibraltar a reconocer las obras de firtificación de las mismas con la firma del Rey, 20 de mayo de 1587, A.G.M.M., Colección Aparici(以下 C.A.), Tomo III, Signatura(以下 Sig.)1-5-3, número(以下 n.)625, fol.163-164.

注 21) フラティンの計画案に関しては参考文献 15), pp.17-18.

注 22) 国防諮問委員会は、軍隊や指揮官の配属、軍需品そして築城といった国防や軍事全般を扱う宮廷内部の組織で、国王が決定を下す際に必要となる見解や意見が同委員会から諮問される。参考文献 2), p.42.

注 23) Copia de minuta de consulta del Consejo de Guerra, en la que se trata que las obras de fortificación que se debían hacer en Cádiz, 24 de enero de 1591, A.G.M.M., C.A., Tomo III, Sig.1-5-3, n.637, fol.177-178.

注 24) 同工兵に関しては次の拙論で扱った。16 世紀後期スペインの要塞化事業における工兵の活動と職能 ―クリストバル・デ・ロハス(1555 年頃-1614 年)の活動歴からの考察―、学位論文(東京大学), 2005.3. Shinichi Takayanagi: Actividades de Cristóbal de Rojas en la expedición de Breaña(Francia). Fortificación durante el periodo de la intervención militar de Felipe II en la guerra civil de Francia: construcción del fuerte de Blavet y del León, Castillos de España, n.144, Madrid, pp.31-43, 2006.

注 25) 注 23 で引用した 1591 年 1 月 24 日の審議録(fol.177)には、“カディスは、信頼することができず、また、安全でもない、様々な国籍から構成される非常に多くの外国人が集まって滞在している商売の場所であるため、簡単に占拠されてしまう(...siendo lugar de trato donde concurren y viven tantos extranjeros de diversas naciones de quien no se puede tener confianza ni seguridad, podría facilmente ser robada, ...)”と記載されている。

16 世紀末のカディス市の人口は 5 千人未満であったが、1645 年には約 20,600 人に増加していたと推測されている。外国人の割合に関しては交易量や季節によって大きく変動し特定することは困難であるとされている。その一方で、下記論文では、1577 年の同市の守備隊に関する記録から、外国人の割合や国籍に関する 1 つの指標が示されている。守備隊は計 8 個の師団(compañía)から構成されており、その内 4 個は主にカディス以外の出身者または外国人で

ある 245 人から構成されており、カディス出身者から構成される 4 個の師団の総数 278 人と大きな違いはないと指摘されている。カディス以外の出身者または外国人の国籍と人数に関してはイタリア・ジェノバ出身者が 57 人、スペイン・ビスカヤ出身者が同じく 57 人、フランドル出身者が 38 人、ポルトガル出身者が 93 人となっている。これらの出身地には、フランスやイングランドといった当時スペインと激しく対峙していた国は含まれていない。これらの記録はあくまでも守備隊に関するもので、交易で同市を訪れる外国人の構成を直接示すものではない。

Hipolito Sancho de Sopranis: Estructura y perfil demografico de Cádiz en el siglo XVI, Estudios de Historia Social de España, II, C.S.I.C., Madrid, pp.534-612, 1952, pp.544-545.

注 26) Copia de consulta del Consejo de 3 de octubre sobre la fortificación de Cádiz, año 1597, A.G.M.M., C.A., Tomo III, Sig.1-5-3, n.685, fol.289-292.

注 27) 5 人は次となる。括弧の中は当時の等級を表している。Pedro de Velasco (Capitán General de Ejército y Miembro del Consejo de Guerra), Luis Fajardo (Capitán General de Armada de Guarida de las Indias), Pedro de Toledo (Capitán General de Armada de Napoli), el Conde de Fuentes (Gobernador del Estado de Milán?), Juan Andrea de Doria (Miembro del Consejo y Capitán General de Oceano y Mediterráneo). 各々の意見書は以下となる。Copia de carta de D. Pedro de Velasco, 26 de agosto de 1596, A.G.M.M., C.A., Tomo III, Sig.1-5-3, n.666, fol.224-232. Copia de la contestación dada por D. Luis Fajardo, 18 de febrero de 1597, idem, n.678, fol.264-268. Copia de la contestación dada por D. Pedro de Toledo, 18 de abril de 1597, idem, n.679, fol.268-270. Copia de los pareceres del Conde de Fuentes y Cristóbal de Rojas, 3 de mayo de 1597, idem, n.680, fol.271-272. Copia del parecer del Príncipe Juan Andrea de Doria, 11 de agosto de 1597, idem, n.682, fol.279-284. なお Pedro de Velasco, Luis Fajardo, Juan Andrea de Doria の 3 人の意見書は次の文献でも扱われている。参考文献 15), pp.29-31, 34-36, 38-40.

注 28) 城塞案の支持は Pedro de Velasco と Luis Fajardo で、Pedro de Toledo, Conde de Fuentes, Juan Andrea de Doria は反対している。注 27 と同じ。

注 29) 城塞案に反対していた 3 人(Pedro de Toledo, Conde de Fuentes, Juan Andrea de Doria)の根拠にはそれぞれ都市の人口減少に伴い外国人も減少したことが含まれている。注 27 と同じ史料の fol.269(Pedro de Toledo), fol.272(Conde de Fuentes), fol.281(Juan Andrea de Doria)。また 1597 年 10 月 3 日に開催された諮問委員会の記録には「スパバッキイ案の城塞の建設を中止した理由として次のように記されている。」“なぜならば都市には軍隊が駐屯しており、今は外国人を含め非常に人口が減っているため城塞の建設の主な動機となっていた都市が占拠されるという恐れがなくなったためである(porque habiendo de haber en aquella ciudad presidio fromado y estando tan despoblada como hagora esta de estrangeros cesa el temor de ser robada que hera la causa que mobia a hacer el castillo mayormente.)”。注 26 と同じ史料の fol.290.

注 30) 注 1) で引用した高柳(2009.1.), p.277.

注 31) Copia de carta de Juan Velázquez sobre el proyecto de Espanochi, 23 de febrero de 1595, A.G.M.M., C.A., Tomo I, Sig.1-5-1, n.55, fol.89-96. Copia de relación de Tiburcio Espanochi, 1603, idem, Tomo XI, Sig.1-5-11, n.1606, fol.60-62. これらの 2 つの史料は活字写本の形で次の文献に掲載されている。なお本研究では 1595 年の史料については活字写本を用いた。参考文献 16), pp.128-133, 147-148.

注 32) Copia de los votos del Consejo al discutirse las trazas del Fratin, año 1574, A.G.M.M., C.A., Tomo I, Sig.1-5-1, n.53, fol.87. この史料は参考文献 16), pp.126-127 に活字写本されている。しかしその後アルバ公(Duque de Alba, 1507-82)は都市部にも防衛すべきであると、フラティンは都市部に稜堡を増設する築城案も 1576 年に作成している。参考文献 5), pp.178-180.

注 33) ソトはスパバッキイの助手(ayudante)であった。ソトの経歴に関しては次の文献に詳しい。Angel Laso Ballesteros: Tradición y necesidad, la cultura de los ingenieros militares en el Siglo de Oro: la biblioteca y la galleria del capitán don Jerónimo de Soto, Cuadernos de Historia Moderna, n.12, Madrid, pp.83-109, 1991.

注 34) 1641 年, 1644 年, 1692 年に議論されている。

注 35) 注 31 で引用した 1603 年の報告書の fol.61.

注 36) 参考文献 16), p.130.

注 37) Copia de cédula de 20 de septiembre de 1609 sobre las defensas en San Sebastián y Fuenterrabía, A.G.M.M., C.A., Tomo XI, Sig.1-5-11, n.1611, fol.76-77.

注 38) 同図は国王宛ての 1641 年 5 月 5 日と同年 8 月 15 日付けのディエゴ・デ・イサシの書簡と共に送付された。これらは「コレクション・アパリシ」では次の史料となる。Copia de carta D. Diego de Isasi, 5 de mayo, sobre las fortificaciones de San Sebastián y parecer de D. Juan Garay acerca de las mismas, A.G.M.M., C.A., Tomo XII, Sig.1-5-12, n.1.797, fol.116-117. Copia de carta de Diego de Isasi, de 15 de agosto, sobre las fortificaciones de San Sebastián, año 1641, idem, n.1.811, fol.148-151.

注 39) 注 25, 注 27, 注 29 の史料。

注 40) José Antonio Azpiazu: Actividad mercantile y vida municipal en San Sebastián (A propósito de un pleito de principios del siglo XVII), Boletín de Estudios Históricos sobre San Sebastián, n.28, pp.71-100, 1994. Azpiazu の研究はバジャドリードの公文書館で見出された訴訟の史料 (Archivo de la Real Chancillería de Valladolid, Sección Pleitos Civiles, La Puerta (F) 1724-2)を基に当時の社会や経済の実情を理解することを目的としている。1813 年の大火災によって、サン・セバスティアンの歴史を再現できる史料のほとんどが焼失しており、同研究は歴史の隙間を埋める作業となっている。訴訟の記録はチャンシリエリーア(Chancillería, 昔の最高裁判所)に起こされたものである。この訴訟は公的な権力を用いて経済的に利益を得ているグループと不利益を被っているグループとの対立に起因しているとされる。なお Azpiazu の論文には最終的にどのような判決が下されたのかは言及されていない。

注 41) サン・セバスティアンの人口に関しては、盛んな交易や漁業によって人数が多く、外国人を含めると、666 棟の家屋があり、約 16,000 人であったと 17 世紀初頭の歴史書に記されている。Azpiazu, op., cit., p73. また 16 世紀の人口構成に関して、特にフランスからであるが、外国からの居留民が多かったことが指摘されている。José María Imízcoz: Hacia nuevos horizontes: 1516-1700, Historia de Donostia- San Sebastián, NEREA, 2004, p.60.

注 42) Azpiazu, op., cit., pp.87-88.

注 43) 参考文献 16), p.155. なお本研究では 1622 年の記録の原本または原本の複製を見つけることは出来なかった。

注 44) 次のように報告している。“サン・セバスティアンには私は 3 年間従事しているがここは地元住民の他、あらゆる国籍の多くの外国人から構成されています。...(略)...ここには、その内部に徘徊している、特にフランス人ですが、多くの外国人がおり、ソコアそしてサン・ファン・デルス(訳者注:フランス・ジブール, Ciboure)の港から 6 時間以内に到着する(訳者補足:敵対者にとっての)援軍のことを考えますと、この都市は奇襲に曝されております(La plaza de San Sebastián donde he asistido tres años, demás de sus naturales se compone de gran cantidad de extranjeros de todas naciones, ...(略)...., esta es puesta a una interpresa merodeada dentro por los muchos extranjeros que hay y en particular Francias, al saler(salir?) del socorro que pueden tener por la mar desde el Puerto de Socoa, y San Juan de Luz en menos de seis horas...)”。Copia de parecer de Diego de Isasi, de 1 de febrero de 1643, A.G.M.M., C.A., Tomo XII, Sig.1-5-12, n.1.830, fol.206-207. 参考文献 17), p.32 でも、上記 1643 年 2 月 1 日の書簡が引用されており、都市型城塞が必要な理由として、急増している外国人に加え、多くの交易と騒がしさのため、敵軍からの奇襲に曝されているためであると現地から宮廷に報告されたことが紹介されている。

注 45) Copia de carta de D. Alonso de Vargas, de 9 de febrero, para su majestad acompañando un croquis del recinto de Zaragoza formado por el capitán Francisco Miranda con un proyecto para establecer una ciudadela en el campo del Toro y otro fuerte a la parte opuesta, y la contestación del Rey de 20 de febrero, año 1592, A.G.M.M., C.A., Tomo I, Sig.1-5-1, n.136, fol.218-220. 「コレクション・アパリシ」と多くが重複するが、サラゴサの築城(1591-1597)の多くの一次資料は参考文献 14), pp.123-234 で活字写本されている。上記したバルガスの 1592 年 2 月 9 日の書簡は参考文献 14), pp.134-135 で活字写本されている。

注 46) 注 45 で引用した「コレクション・アパリシ」の最後(fol.220)に国王の返答(contestación)も書き写されている。

注 47) 司令官バルガスの 1592 年 2 月 9 日付けの書簡の中で言及されている主な地点は以下となる。アランの谷(Valle de Aran), ベナスケ(Benasque), アインサ(Aínsa), カンフラング(Canfranc)。注 45 と同じ。

注 48) Copia del parecer que dió el ingeniero Tiburcio Espanochi en virtud de la comisión que se le había conferido para reconocer los pasos de las montañas de los Pirineos, 7 de abril y a la que contestó el Rey el 27 de igual mes, año 1592, A.G.M.M., C.A., Tomo I, Sig.1-5-1, n.142, fol.228-238. この意見書は参考文献 8), pp.213-221 で活字写本されている。

注 49) Copia de minuta de carta de su majestad para Don Alonso de Vargas, trata sobre la fortificación de Zaragoza, 8 de mayo de 1592, A.G.M.M., C.A., Tomo I, Sig.1-5-1, n.146, fol.249-250. 同史料はサラゴサの築城が中心になっているが冒頭にハカ城塞の建設の決定が記されている。この 1592 年 5 月 8 日の史料は参考文献 14), p.143 で活字写本されている。

注 50) Copia de carta del ingeniero Espanochi para su majestad por la que le da cuenta del estado de la obra del fuerte de Jaca y de las fortificaciones de la montaña, de Jaca, 24 de mayo. Contestación de su majestad a la anterior carta, del bosque, a 2 de julio de 1592, A.G.M.M., C.A., Tomo I, Sig.1-5-1, n.151, fol.259-260.

注 51) 注 48 と同じ。

注 52) Copia de carta de Espanochi para su majestad por la que remite las trazas de Jaca, de 13 de mayo, y contestación de su majestad de 27 de mayo, año 1592, A.G.M.M., C.A., Tomo I, Sig.1-5-1, n.150, fol.256-258.

注 53) 3 か所の配置は注 48 の 1592 年 4 月 7 日付けの意見書の fol.233-234 で

述べられている。参考文献 8)の活字写本では pp.216-218 に相当する。また参考文献 10), p.14 でも同意見書から 3 か所の配置が説明されている。

注 54) スパノッキの 5 月 13 日の書簡は注 52 と同じ。他の 2 通は以下となる。Copia de carta de 12 de mayo para su majestad de D. Alonso de Vargas, y la contestación de S. M. a la anterior carta, fechada en San Lorenzo, 27 de mayo, año 1592, A.G.M.M., C.A., Tomo I, Sig.1-5-1, n.148, fol.251-254. Copia de párrafos de carta para S.M del capitán Hernando de Acosta de 11 de mayo, año 1592, idem, n.149, fol.255.

注 55) Copia de carta de para S.M. de D. Alonso de Vargas, 25 de enero de 1592, A.G.M.M., C.A., Tomo I, Sig.1-5-1, n.133, fol.215-216.

注 56) Copia de carta de D. Alonso de Vargas de 19 de junio, y la contestación del Rey de 10 de julio, año 1592, A.G.M.M., C.A., Tomo I, Sig.1-5-1, n.154, fol.270-274.

注 57) Copia de minuta de la carta que S.M. escribe a Tiburcio Espanochi, fechada en El Pardo el 2 de marzo de 1593, A.G.M.M., C.A., Tomo I, Sig.1-5-1, n.172, fol.300-301. この書簡は参考文献 14), pp.189-190 で活字写本されている。

注 58) 注 55 と同じ。

注 59) 3 つの地点はサン・ファン・デ・ロス・パンテス(San Juan de los Pantes), エプロ川の対岸、宮殿である(図 14 の 12 と 27)。エプロ川は図 14 の 30 である。

注 60) Copia de relación de los fuertes que se podían hacer en Zaragoza formada por el capitán Francisco de Miranda e incluida en la anterior carta(cartas de Alonso de Vargas de 9 de febrero, 注 45 の史料), año 1592, A.G.M.M., C.A., Tomo I, Sig.1-5-1, n.137, fol.221-224. 同史料は参考文献 14), pp.136-138 で活字写本されている。

注 61) ミランダ隊長は城塞 A の配置の候補地として 2 か所を示している。1 か所目はトロ郊外で、2 か所目はラ・グエルバ郊外である(図 14 の 28 と 33)。ラ・グエルバ郊外(図 14 の 33)の場合、2 つの修道院は解体される(図 14 の 3 と 20)。そして要塞 B は図 14 の 25 と記されている地点に建設される。

注 62) Copia de carta de Espanochi de 19 de junio sobre la elección del sitio para fortificar Zaragoza y también del castillo de Jaca, año 1592, A.G.M.M., C.A., Tomo I, Sig.1-5-1, n.153, fol.262-269. 同史料は参考文献 14), pp.145-150 で活字写本されている。

注 63) 注 62 の fol.263. 参考文献 14), p.146.

注 64) 注 62 と同じ。

注 65) 注 61 を参照。

注 66) 城壁外周部の整地に関しては注 10 で引用した拙稿で考察した。

注 67) 注 55 の史料の fol.216.

注 68) 注 49 の史料の fol.249-250. 参考文献 14), p.143.

注 69) 本研究では場所を特定できなかったが、スパノッキはその他にも前方に位置している修道院(un convent de monjas)の解体が望ましいと述べている。

注 70) カスティージャからサラゴサまでの距離は 19 レグア(legua, 5572m)であるとミランダ隊長の報告書には記されている。注 60 の史料の fol.222.

注 71) 注 62 の史料の fol.264. 参考文献 14), p.147. パンプロナ城塞の規模に関して、同城塞は 1571 年頃設計されているが 1592 年の時点でも完成しておらず、その約 20 年間に要した建設資金は注 73 の通り 500,000 デュカードとなっている。同じ五角形平面のハカ城塞の建設費の試算額が 70,000 デュカードであることから、パンプロナ城塞が大きな規模であったことが理解できる。

注 72) 注 56 の史料の fol.272.

注 73) 宮廷の記録(1592 年 7 月 10 日)では、スパノッキはパンプロナの城塞と同じような規模を望んでいるが、同城塞には 500@500,000 デュカード以上の資金が投入されており、さらに完成までに多くの年数が必要となっていると、建設費や工期の点からスパノッキ案を非難している。注 56 の史料の fol.273.

注 74) 注 56 と同じ史料の fol.272-273. 1592 年 7 月 10 日の書簡に 4 つの稜堡を増設する実施案が示されているが、200 人の兵士を収容する兵舎に関しては本研究で確認できた限り、次の 1593 年 2 月 7 日付けの国王からスパノッキに対する指令で初めて記されている。Copia de orden a Espanochi de 7 de febrero, año 1593, A.G.M.M., C.A., Tomo I, Sig.1-5-1, n.170, fol.296. この指令は参考文献 14), p.176 で活字写本されている。

注 75) 1592 年 6 月 19 日の書簡でスパノッキは、宮殿の改築案には 2 つの稜堡を都市に向ける設計と、1 つの稜堡は都市に向け、もう 1 つは河に向ける設計の 2 つの意見があると述べている。この記述に基づく設計に関しては、図面がないため、十分検証できなかった。注 62 の史料の fol.264. 参考文献 14), p.146.

注 76) 注 57 と同じ。

注 77) 参考文献 3), pp.109-110. 参考文献 5), pp.303-306.

注 78) 参考文献 4), p.26.

注 79) パンプロナの城塞でも配置は大きな課題であった。参考文献 3), p.119. しかしハカの様に複数の配置は議論されなかったと思われる。ファン・パウティスタ・アントネリ(Juan Bautista Antonelli, 1510?-88)は 1565 年の報告書でパンプロナに城塞を建設する構想を述べているが、囲い地の拡張と城塞を建設する場所(espacio)に関しては、後のフラティンの設計と同じであったと理解でき、双方は配置の点で同意見であったと指摘されている。参考文献 5), p.304.

ON PROJECTS OF CITADELS IN FOUR SPANISH CITIES BY TIBURZIO SPANNOCCHI

*Shinichi TAKAYANAGI**

* Part-time Lect., Daido University, Dr.Eng.

The purpose of this study is to consider the features of Spanish citadels in the late 16th century by analyzing the projects of the citadels in four cities by Tiburzio Spannocchi(1541-1606), Cádiz, San Sebastián, Jaca and Zaragoza. These four cities are categorized into two groups. One is a city near the border where some revolt against the Spanish Court could occur from the inside, Jaca and Zaragoza, the other an international port where many foreigners were always coming and going from several countries, including France and Holland that conflicted with Spain at that time, Cádiz and San Sebastián. For these projects in four cities, the citadels only in Jaca and Zaragoza were realized. For the purpose described above, this study analyzes the projects from three points of view.

First, this study analyzes the main reason why the Court intended to build a citadel in Cádiz and San Sebastián, which has not been studied enough before, unlike Jaca and Zaragoza. And this study shows that the projects in Cádiz and San Sebastián were made because of the fear in the Court against many foreigners always coming and going for trading. The Court regarded these two international ports as a city which could be easily occupied because the council in the Court thinks that foreigners could be harmful for the security of a city or even try to occupy a city. This interesting view for an international port motivated to make the project of a citadel. About Jaca and Zaragoza, the projects were made to control the cities after the revolt against the Court in Zaragoza in 1591 as some Spanish historians already had pointed out. Therefore, we can conclude that there are two elements that motivate to make the projects of a citadel in these four cities, those are the fear against foreigners in an international port and the political unstableness in a city near the border.

Second, this study tries to clarify some general elements in the designing and planning process of a citadel. And this study concludes that the disposition of a citadel was the most important element in the planning process and it was evaluated by the distance between the center of a city and citadel so that a citadel could dominate and oppress a city efficiently. This important element is also confirmed in Cádiz and San Sebastián where the citadels were projected by reusing the medieval castle or old bastions.

Finally, this study tries to analyze Spannocchi's professional abilities as a military engineer. And this study shows that his abilities were clearly demonstrated in practical aspects like field survey, designing, supervising the construction works, and so on. Spannocchi designed the citadels in Jaca and Zaragoza. But his original designs or plans were not fully realized because the Court judged that his plans were not appropriated in scale and proportion. So, he changed the original plans according to the instructions sent from the Court.

(2015年3月2日原稿受理, 2015年10月6日採用決定)